
リリカル銀魂 Strikers ~ 銀女神鎮魂歌 ~ ショートストーリー

真王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉ショートストーリー

【Nコード】

N8198W

【作者名】

真王

【あらすじ】

我がと投稿しているリリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉のショートストーリー。みたいなら見てくだせえ！

なのは「ライバルだもん」(前書き)

「銀さんは私の物だよ」

なのは「ライバルだもん」

機動六課のお食事タイム、ある時なのはとフェイトに言った。

なのは「フェイトちゃん、この前銀さんに裸見られたとかどうとか
いったよね？」

フェイト「え？あ、い、言ったよもちろん」

フェイトはいきなりに発言にどきまぎながら答える。

だがななめ45度傾いた質問をしてきた。

なのは「だったら………そ、そのまま銀さんのベットに入っ
たりしてないかな？」

ブ――――

――――！！！！！！

それを聞いたフェイトはもちろん銀時や他に食事していた方々まで
吹いた。

銀時「ちよつとおおお！！！？なのはさんんん？？お前なんてこと
言つてんのおお！！？」

フェイト「なななななななのは！！！！そそそそそそんなこ
としてしてないから！！！！！！」

銀時は怒鳴り、フェイトは全力で否定した。

なのは「そっか、そっか、そっか」

なのは笑顔になって銀時とフェイトは安心の息を吐くが、

なのは「なら、今から犯つても遅くはないってことだね!!」

銀時「尚更アウトオオオオオオオオオオ!!!!!!」

もはや取り返しがつかなさそうな状態なのは。

なのは「そんなわけで、銀さん！私が永遠の妻になるから！」

フェイト「なのはあああ!!! 銀時は渡さない!!!」

シグナム「テストロツサ!!! 貴様も抜け駆けは許さんぞ!!!」

アルフ「アタシだって!!!」

リンフォース「銀時は私の物です!!!」

ティアナ「兄さんを汚すなあ!!!」

スバル「銀さんは渡しませんよお!!!」

そう言ってラバーズ達は訓練場で戦争を起こしました。

銀時「なんでこーなるの？」

ネプテューヌ「もてる男の宿命だよ・・・的な」

この後銀時も彼女達のファンクラブの方々（+ビビ）に追われることとなるのは言うまでもない。

なのは「ライバルだもん」(後書き)

感想を待つ。

「ヒ」「なのちゅんん！」（前書き）

「ハア、ハア、ハア、……はっ！？イカン！抑えなきや押さえなきや……」

「ビビ」なのはちゃんー！

ネプギアがビビになののについて話している。

ネプギア「ビビさんってなのはさんのことが好きなんですか？」

ビビ「もちろんよ！転生する前から私なのはちゃんだーい好きなんだからー！..」

なのは絡みになると興奮するビビ。

ビビ「でもまあ、なのはちゃんあの言葉も聞きたかったなあ...」

ネプギア「あの言葉？」

ネプギアは首をかしげる。

ビビ「無印なのはちゃんのあるセリフだけだね。まずレイジングハートを回して...」

ビビが木の棒を持って振り回してまるで無印のジュエルシード封印のしぐさをする。

ビビ「リリカル・マジカル・ジュエルシード封印！どうだった？」

ネプギア「どうだったって言われましても...恥ずかしくないんですか？」

ネプギアは少々引いている。

ビビ「全然！寧ろなのはちゃんになりきった感じ！無印なのはちゃんはこんなポーズしてとっても可愛いんだからー！..」

ビビは目を輝かせている。

ビビ「さあネプギアちゃん！一緒にリリカルマジかるやろっよ！答えは聞いてない。リリカルマジカル？」

ネプギア「リ、リリカルマジカル・・・」

ノリノリのビビにどきまぎのネプギア。

ネプギア「やっぱり恥ずかしいよこれ・・・！」

その近くの木陰

なのは「ビビちゃん？ネプギアちゃんも一緒に頭ひやそっか？」

笑ってない笑顔で木をメシメシと握りながら黒いオーラを纏っているのが見えていました。

「へ」「なのほちゅーん！」（後書き）

19歳じゃ恥ずかしいものだらうね…

シグナム「戦闘なう」(前書き)

「私は常に戦い続けるのみ」

シグナム「戦闘なう」

カキイン！カキイン！

訓練場でシグナムとエリオが稽古している。

シグナム「甘い！」

エリオ「うわ！」

エリオは一本取られる。

シグナム「ここまでだ。出直せ」

エリオ「うう・・・でもまだ負けませんよ！」

エリオは負けない闘志を燃やしている。

シグナム「フ、その意気込みを忘れるな」

エリオ「ハイ！」

エリオは訓練場を後にした。

すれ違いにレオンがやってくる。

レオン「性が出るな。シグナム」

シグナム「レオンか」

シグナムはレオンが持ってきた水を飲む。

レオン「私にもエリオのようなああいうちゃんちゃん感じに奴らを弟子にしてたことがあったな」

シグナム「エリオと私は師弟ではない。だがレオンが弟子を持つてたことに興味があるな」

レオン「ああ、私によく負けた後『いつかレオン師匠を超えてみせる！』とかよくいってたな。今は山の中で武者修行をしているらしいがな」

シグナム「ふ、似ているな、それは」

レオンとシグナムは笑う。

レオン「それはそれとして、始めるか！」

シグナム「そうこなくてはな！」

レオンとシグナムの戦闘が勃発した。

やっぱり似た者同士であった。

アイエフ「メアド決めなきや」(前書き)

「やっぱケータイはいいわね」

アイエフ「メアド決めなきゃ」

ピッ、ピッピッ

アイエフがケータイをいじっている。

アイエフ「ん、だんだんマスターしてきたわ」

アイエフはパクロスをやっていた。

コンパ「アイちゃん、いい加減ケータイを使いすぎです」

アイエフ「あ、待って待って、切りのいいところで止めるからなのは「でもそう言って止めなかったのどこのどいつかなあ？」

フェイト「それに子供がそれを使っちゃだめだよ」
ネプテューヌ「イヤあ、アイちゃん3年前からも使ってたみたいだよ」

レーティア「そうなの？」

銀時「んなこたあいいがさっさと終われよ」

銀時がケータイを取り上げようとする。

アイエフ「ちょっとはなしなさいよ」

銀時「いいからやめろ」

アイエフともみくちやしているど、

パキヤッ

銀時、アイエフ「あ」

全員「あ」

アイエフのケータイは銀時がふんずけてしまった。

アイエフ「あああ・・・私のケータイがあ・・・」

なのは「銀さん・・・」

フェイト「銀時・・・」

銀時「え？ちよ、止めて、その目で見ないで」

シヨックを受けるアイエフに全員が銀時を睨む。
すると、

アイエフ「うりゅ・・・」

アイエフが涙目になった。

フェイト「あ、アイエフ？どうしたの？」

アイエフ「私、ケータイが無いと・・・」

コンパ「すいません、アイちゃんケータイが壊れるとこんな感じになっちゃいます・・・」

どうやらコンパはアイエフの豹変を知っているらしい。

なのは「だ、大丈夫アイエフちゃん・・・」

アイエフ「うん、ありがとなのはちゃん・・・」

全員（コンパ除く）「ちゃん!？」

アイエフらしからぬちゃん付け。

確かに変になってる。

コンパ「ほら、お手手つないであげるですから付いてくるです」「
アイエフ「うん……」

幼児退行したアイエフはコンパと手をつないで一緒に歩く。
とつてもシユールだ。

全員啞然とし、

ネプテューヌ「アイちゃん、あんな一面あつたんだ……」

銀時「なんか……すっげ〜悪いことしたな……」

ジャンヌ「で、でもでも、あのアイちゃん見て胸キュンしちゃった」
なのは「た、確かに」

はやて「否定できひんな……」

ビビ「ギャップ萌えエエ……（*´、´）」「

レーティア「ちよつともつたいないわね……」

ギルシア「ギャップ萌え最高!!」

アリア「あります!」

ムツリ「……」

アイエフの意外すぎる一面を見た一同であつた。

アイエフ「メアド決めなきゃ」(後書き)

アイエフはケータイが無いと幼稚になっちゃうんです

ジャンヌ「夏ですから」(前書き)

「夏と言えばかき氷や夏祭りやスイカ……そして海！最高だわ……」

ジャンヌ「夏ですから」

ミッドチルダは夏真っ盛り。

ジャンヌ「ねえみんな。今度海行く時のために水着買おつか」

はやて「水着か。そりゃ大賛成や。たわわと揺れるあれも拝まん
と…」

なのは「はやてちゃん？」

はやて「うそうそ、なのはちゃん冗談やから…」

女性陣は水着の話で持ちきりだ。

ネプギア「水着ですか」

ネプテューヌ「それならちようど良かった！是非試してみたかった
ものがあるんだよね」

はやて「なんや？もったいぶらず言つて見い」

ネプテューヌ「フッフ、見て驚け！これだよ！」

ネプテューヌが取り出したのは紫色のビギニ。

・・・だがネプテューヌの体ではあわない。

なのは「・・・ネプちゃんどういうこと？」

ネプテューヌ「だから最後まで聞いてって。変身」

ネプテューヌは女神化した。

先ほど持っていた紫ビギニを着て。

パープルハート「どうかしら？」

ノワール「ま、まさかそのパターンでいくなんて…」

フェイト「凄い発想だね」

ジャンヌ「グラビアアイドル狙えるかも？」

レーティア「それじゃあ各自水着を用意しましょう？」

というわけで女性陣は水着を買いに行った。

ヤルオ「・・・これはいいこと聞いた。女だけ楽しむのは駄目だよ。僕等もいくんだからな」

影でヤルオが盗み聞きしていたのは言うまでもない。

その後はやてとか貧乳組みが暴走していたことは追加しておく。

ジャンヌ「夏ですから」(後書き)

海はいいな。

コンパ「みなさん」(前書き)

「ご飯の時間ですよ」

コンパ「みなさん」

機動六課食堂

コンパ「皆さん、今日は私が精神込めて作った弁当があります」
ネプテューヌ「おお〜！コンパのお料理久しぶりだよ〜！」

コンパが手づくり弁当を持ってきてネプテューヌらは嬉しそうだ。

なのは「あ、コンパちゃん料理で来たんだ」

コンパ「看護師として当然のことをしたまです。エッヘン」

胸を張るコンパ。

技術が低いのが玉にキズ。

アイエフ「まあパーティだった時はコンパが料理担当だったしね」

ネプテューヌ「こっぴどく見えて料理経験ないしね！」

アイエフ「余計なこと言わないの」

コンパ以外は料理経験ゼロのようだ。

銀時「でだ。どんな料理なんだろうな」

コンパ「試食してみます」

コンパの仰ぎに銀時は試食。
すると、

銀時「お、マジでうめえ！」

新八「ホントだ！」

神楽「うおお！！コンパマジ天使アル！」
はやて「うちに引けを取らんな…」

ほとんどコンパの料理は高評価だ。

フェイト「うん、コンパがいつかいいお嫁さんになるかも」

アイエフ「（ピクツ）」

ジャンヌ「いいね！私なら貰おうっかな？」

ビビ「私もいいかも（* *）」

アイエフ「（ピクピクツ）」

いきなりコンパを嫁にしようか宣言が聞こえる。

ギルシア「じゃあいだとつて俺様が…」

アイエフ「いい加減にしなさいよあんたら！！コンパはあたしの嫁
よ！！！」

全員「……………」

アイエフ「……………あ」

ギルシアが言いかけたところアイエフが自爆発言投下。

コンパ「あいちゃんったら／／／／／」

コンパは顔を赤くする。

ネプテューヌ「アイちゃんヒューヒュー」

銀時「お前そんな趣味があったのか」

アイエフ「ち、ちが、そんなじゃないのよ！！！」

レーティア「分かってるわ。あなたはいいゆり関係を築けるって」

ビビ「羨ましいよコンチクセウ！」

アイエフ「分かってないイイイイイい！……！……！誤解よそれはア
アアアアああ……！」

そしてこの後もアイエフはそのネタでコツテリ絞られた。

コンパ「みなぎくん」(後書き)

そんなパターンもある。

「ビ」「ネプギア・・・」(前書き)

「なんて恐ろしい子...!」

「ビビ」「ネプギア……」

ビビ「ハア……」

ビビがなぜか疲れた顔をして溜息を吐く。

ネプテューヌ「あれ？ビビちゃんどうしたの？」

そこへネプテューヌが声をかける。

ビビ「ああ、ネプテューヌちゃん。聞いてよ、ネプギアちゃんが……」
ネプギア「リリカル・マジカル、魔法少女リリカルネプギア、ここに参上です！」

ビビが言おうとしたら無印なのはバリアジャケットを着てレイジングハート（本物）をくるくる振り回しているネプギアが現れた。

ネプテューヌ「………ビビちゃん？これどういうこと？」

ビビ「いやあのね、一緒に無印なのはちゃんの踊りやろっつていつも隠れてやってたらネプギアちゃんすっごいハマっちゃってすっごい完成度もっちゃって……何か負けた気がして……」

ビビはあまりのネプギアの踊りの完成の良さに落胆した。

ネプテューヌは頭を抱える。

ネプテューヌ「なんてことしてくれるのよ。ネプギアはハマったらノリ良くなっちゃうんだよ」

実際ベールがネプギアにあるゲームをやらせてそのゲームにはまっ
てしまったことがある。

ネプギア「これが私の全力全開！スターライトお……」

ネプテューヌ「は！？ネプギア！それ以上はダメえええ！……」

ネプギア「ブレイカー……！！！！！！！！！」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！

ピンクのキノコ雲ができました。

ビビ「ネプギア……恐ろしい子……」

ネプテューヌ「回復アイテム……キボンヌ……」

ネプギア「リリカル・マジカル……」

巻き込まれたビビとネプテューヌは気絶し、ネプギアは無傷でスキ
ップしてました。

余談であるが、なのはは、

なのは「ここから出してなのおお~~~~！！！！！！！！！！」

ハマったネプギアの作ったケージで閉じ込められていました。
数時間後銀時が発見された。

ネプギア、ある意味恐ろしい存在である。

ビビ「ネプギア・・・」(後書き)

ちなみにベールがやってたのは男が裸のゲーム。

それゆえネプギアは裸をハマってしまったことがあります。(ゲー

ム経験談)

「プリア」プリアです」（前書き）

「現在プリニーの指導係としています」

プリア「プリアです」

銀時「お〜い、パフェ持ってきてくれないか？」

プリア「チョコパフェ持ってきました」

銀時「お、サンキューな」

銀時がプリアからパフェを買った。

ティアナ「ん〜、このペースだと間に合いすぎね…」

プリア「すいませ〜ん、はやてさんから追加の書類です」

ティアナ「あ、そこに置いといて、ちょうどもう仕事欲しかったのよ」

ティアナの隣にプリアは書類を置く。

桂「・・・無償にのりそばが食べたくなってきた」

プリア「桂さん、のりそばありますけどあげますよ？」

桂「おお、かたじけないプリアどの！」

桂はプリアを感謝した。

レーティア「ああ、買い物に行くのを忘れてたわ…」

プリア「それでしたら、僕が買ってあげましたよ。それからリルち

やん用のおむつも」
レーティア「あら、気が聞くのね」

そんなある日

銀時「ところでようプリア、お前未来予知的なもん持つてるか？」
プリア「そんな大それたものは持ってませんよ。ただ次にするべきことをしなければならぬだけです」

なのは「いやいやそうじゃないよ。人が困つてるときにひよこつと現れてすぐに解消してくれることに驚いてるんだよ」

プリア「前もって事前に用意しないとイケない癖でしてね」

銀時「お前：少しプリーっばいぞ」

プリア「確かに、僕はプリーニの特性を色濃く残ったのかもしれない。どうなるにしろ、これが今の僕ですから」

銀時、なのは「……………」

プリア「おっと、はやてさんが仕事疲れでジュース飲みたがってる気がする。買ってこよう」

そう言つてプリアはジュース買うために走り去つていった。

なのは「頑張つてるんだね」

銀時「あいつを悪用する人がいなければいいがな……」

その後もプリアは何時も通りやっていた。
だがプリーニと同じくパシリということになる。

プリア「プリアです」(後書き)

ある意味特殊能力だろうね。

神「たこ焼きや！」（前書き）

「ワイは絶対に伝説のたこ焼きを作るで!!」

神「たこ焼きや！」

ネプギア「 그레이さんから聞きましたけど、たこ焼きが好きなんですか？」

神「おうよ。俺様はたこ焼きが大好きだ」

ネプギアと神はたこ焼き談義をしている。

神「しかもワイはな！食べるのも好きだが作るほうが好きなんや！じゅーじゅ 焼くあの音とあの触感を作り出す感覚がとっても好きなんや！」

ネプギア「そ、そうですか」

人が変わったかのようなしやべり方をする神にネプギアは少し引く。

神「それにな、ワイは何時か究極のたこ焼きを作るのが目標なんや。いつちよ目指したるでー！！」

背景に波しぶきを出して叫ぶ神。

ネプギア「あはは・・・、ところで思ったんですけどもし神様じゃなくなったらどうしてたんですか？」

神「俺様が神じゃなかったら？そうだな・・・出来る事と言えばたこ焼き屋を営んでいたな。愛する妻もな」

ネプギア「たしかに、神を取ったらただにたこ焼き屋さんですね」

神「さり気無くムカつく気がするが・・・」

神はジト眼でにらむ。

神「そう言うお前は女神取ったらどんなことやってたよ？」
ネプギア「え？」

ネプギアは返事に困った。
女神ではなくなった自分。
ただの人間となった自分はどんなことをやっているのか。

ネプギア「・・・分かりません・・・」

神「そうかい、なら将来のこと考えておくんだな」

神はそう言って去っていった。

ネプギア（女神じゃなくて人間の私達…もし異世界にいる英雄達や
伝説の方々も普通の人としてならどんなことをやってたんだろっ？
・そして私達は人間だったら一体どんなことをやってたんだろっ
？）

ネプギアは疑問に思いながら六課へ戻った。

神「たご焼きや!」(後書き)

どうなるだろうね。

井戸子さん「ビデオ……」(前書き)

「しあわせ……ほし……」

井戸子さん「…ビデオ…」

ネプテューヌ「たっだいま」

銀時「遅かったなおい」

ネプギア「いえ、ちよつとした事がありました」

ネプ姉妹が買い物から帰ってきた。

手には買い物した商品と……一本のビデオ。

銀時「なんだそれ？」

ネプテューヌ「これ？髪の長い女の人私たちのファンだつて言つて渡してくれたんだ」

ネプギア「あの人いわく『幸せのビデオ』つていうんです」

姉妹はニコニコしながら言う。

するとビビが一つの質問を投げた。

ビビ「ね、ねえ2人とも。その女の人ってどんな人？」

ネプギア「黒いロングヘアに白ワンピースを着た人です。でも髪が長すぎて顔がよく見えなかつたですけど……」

ビビはそれを聞いた瞬間少し顔を青くした。

ネプテューヌ「じゃあ私たちがちよつと整理してくるから」

ネプ姉妹はどつかへ去った。

ビビは頭を抱える。

ビビ「ぬがああああ!!!まさか本当に実在したなんてえええ!!!」

銀時「え?なに?なにがなの?」

銀時は付いていけてない。

ビビ「あのビデオのことよ!私暇つぶしで図書館行ったんだけどそのなかで幸せの井戸子さんってタイトルの本があったの。そのビデオを見たものは7日後に幸せが訪れるって」

銀時「なんだよ言いもんじゃねえか」

銀時は軽く言うがビビは否定。

ビビ「よくないわよ!!!あのタイトルの本当の呼び名は死を合わせると書いて死合わせの井戸子さんなのよ!!!そして2人があったあの顔が隠れた髪の女は井戸子さんなのよ!!!」

銀時「マジでかあああああ!!!」

ビビ「ネプギアちゃあああああん!!!早まらないでええええええええ!!!」

銀時「待つてろよネプテューヌ!!!!!!!」

2人は全力で阻止に入った。

後日、ネプテューヌとネプギアはそのビデオを見ておらず、はやて、桂が興味本位でそのビデオを見て7日後に惨劇ができたの言うまでもない。

井戸子さん」「…ビデオ…」(後書き)

元ネタ

井戸子…まんま貞子です

死合わせのビデオ…呪いのビデオ…こちらもリンググネタ

レーティア「ギルシア〜?」(前書き)

「誰にもこの愛と絆は壊させはしないわ」

レーティア「ギルシア？」

六課の食堂にて

レーティア「ギルシア、そんなに急いで食べないの」

ギルシア「いやなに、レーティアの手料理を思うと無性に食べたくなっただけな」

レーテョア「あら嬉しい。じゃあ愛弁当持ってて正解だったわ」
全員（持ってきたんかい！！！！）

レーティアとギルシアがお互い向かいあって食事している。

ちなみに女性人男性人は2人を監視しながら食べている。

ギルシアは弁当を開けた。

ギルシア「お？日本弁当（ご飯の真ん中に梅干しを入れたあれ）をハート型にしておかず付きか」

レーティア「だって、梅干しにしようかと思ったんだけどギルシアの愛が伝わらない気がしてタラコでハートを作ったんだもん」

頬を赤く染めてもじもじするレーティア。

それで萌えたと言う男がいたとか。

取りあえずギルシアが一口。

ギルシア「む？この塩味と食感！行けるぜ！！」

レーティア「ほんと！？良かった！貴方のために愛を注いだのが大正解みたい！！」

レーティアは抱きつく。

嫉妬の邪念がどんどん増していく。

レーティア「ギルシア……」
ギルシア「レーティア……」

(以下繰り返し)

その時2人の空間からピンク色のオーラが現れ、範囲内にいる方々は苦しんでいる。

銀時「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！なんじゃこりやああああ
！！！！」

土方「か、体が、おされていくうううう！！」

ビビ「ぐあ、胸が苦しい……」

グレイ「……（手に血が出るほど握りしめている）」

ジャンヌ「こ、これは超愛フィールド！愛パワーが一定以上達すると発生する邪念を追い払う特殊なパワー！」

新八「すでに彼ら以外吹き飛ばされてるんですけどおおおお！！！！」

ギルシアとレーティア以外どんどん離れていく。

リル「あう〜」

娘を除けば。

レーティア「あ〜、よしよし。一緒にいい家族をつくりましょうね
〜」

ジャンヌ「愛の力は計り知れないものね」

愛とは恐ろしかったりすごかったりと無限であったりするのだった。

ただ銀時はそれをこなすのは長くなるだろう。

レーティア「ギルシア〜？」（後書き）

愛ってすごいものだと思いますよ！BYフロン

アリサ「まったく・・・」(前書き)

「あたしがしっかりしないとね」

アリサ「まったく・・・」

地球・アリサのコテージ

ネプギアとアリサとさすがが会話している。
ちなみに彼女は興味本位でここに来ただけ。

ネプギア「アリサさんもさすがさんもお金持ちなんですか？」

アリサ「まあね、あたしこつみてもパーフェクトファンリガルだも
ん」
「さすが「私の場合はなんやかんやてきな・・・」

アリサは自慢げに、さすがは困った顔している。

ネプギア「そうですか。ベールさんといい勝負かもしれないね」

思わずつぶやいたネプギアの一言にアリサは突っかかる。

アリサ「ちょっと待ちなさい、いいとこ勝負ってどういうこと？」
ネプギア「い、いえ！ただベールさんもお金持ちみたいで良く部屋
に高額な絵とかゲームを置いてたりしてるんです！」

ネプギアは慌てて弁解。

アリサ「高価な絵にゲーム？」

ネプギア「金色のがく淵付きの絵にゲームがたくさんあるんです。
でもベールさん曰く「この部屋で5%程度ですわ」っていてました」
アリサ「どんな部屋よそれ！！」

アリサはシャウトする。

ネプギア「それに柄が500枚でゲームが全種で1000以上あるってベールさん言っていました」

すずか「…言葉が出ないくらいすごいんだね…」

すずかは本当に反応に困った。

アリサ「どういう御令嬢さんか知らないけど、お金を自分の娯楽のために使うのはもってのほか！そうよねすずか！」

すずか「え？あ、うん」

アリサ「なら話は早いわ。私そいつに説教してくる！」

アリサはダツシュでベールに会いに行った。

すずか（い、いえない。お金で猫をもっと買おうだなんて言えないよ…。可愛いし）

すずかはそんなことで思い悩むのであった。

余談だが、ベールはアリサに注されたにもかかわらず全然反省していなかったらしい。

ベール「（ベールにとって）三種の神器を止めるのはありえないですわ」

何とも強情な人であった。

アリサ「まったく・・・」(後書き)

アリサとシャルマルは髪の毛的に似てると思っス。

「ヴィヴィオ」よし！」(前書き)

「私も強くなるよ」

「ヴィヴィオ「よし！」」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！面白い本を見つけたんだけど！」

ネプテューヌ「面白い本？どんな？」

ヴィヴィオ「ある魔法少女が宇宙を救ったって話」

ヴィヴィオが一つの本を持って語る。

ヴィヴィオ「その昔ある一人の少女がいました。その少女は普通の中学生でみんなと仲良く暮らしていました。すると白い生き物が現れて『僕と契約して魔法少女になってよ』といいました。けど別世界から来たある少女が契約するなど忠告。ですが少女は世界を守るために魔法少女となって魔女を倒し、自分の実を犠牲にして魔女を全て根絶やしにしました。だって」

ネプテューヌ「ふん」

ネプテューヌは興味ありそうな顔をしている。

ネプテューヌ「じゃあヴィヴィオはその子の名前分かる？」

ヴィヴィオ「そのこは・・・」

とある世界

????「ホーリーアロー!!!」

モンスター「グゴオオオオオ!!!」

ピンクのツインテにいかにも魔法少女っぽい少女がモンスターと対峙していた。
そして撃退。

「……世界に混沌が浸食している…早く何とかしないと…」

少女は弓を握りしめて思いを溜めていた。

「……ほむらちゃん」

ヴィヴィオ「よし！」（後書き）

元ネタ

白い生き物：QBである。セリフも。

別世界のある少女：彼女の友達の時使いだと。名前はほむら

????：分かる人には分かるはず

岩沢「音楽なう」(前書き)

「・・・いい音色だ」

岩沢「音楽なう」

ネプギア「へへ、そういうことだったんですか」

岩沢「ああ、私にとって音楽はすくいだと思ってるんだ」

ネプギアと岩沢は音楽のことで話し合っている。

岩沢「そうだネプギア。一緒にガルデモやらないか？」

ネプギア「え？い、いいですよ。わたしなんて・・・」

岩沢「遠慮するな。加わればまたいい人気が出るかもしれないし」

ちよっぴり強引な岩沢。

岩沢「さあネプギア！ハンドを始めよう！」

ネプギア「決定事項なんですかああ！！」

数時間後：

ネプギア「いえ〜い！みんなのってるか〜い？」

完全にノリノリなネプギア。

手にはエレキギター。

岩沢「やるじゃないかネプギア！あたしも負けてられないな！」

岩沢も闘心に火がついた。

後ろの4人は啞然としていた。

ひさ子「あいつ、結構乗りいいな……」

入江「ノリがいいとはまっちゃんだ……」

関根「あそこまで豹変してるね……」

ユイ「ぬぐぐ……岩沢さん……」

そうこうしていると、

ネプギア「あ、思い出したことがありました」

ピタッと止めるネプギア。

ネプギア「実は私達の世界で音楽で人を救おうとしている人がいるんです」

岩沢「お？それはいいことだ。だれなんだ？」

ネプギア「5pb.さん、アイドルだそうです」

岩沢達はおお〜という。

ネプギア「ただ、あの性格が問題ですけど……」

岩沢「あの性格？」

ネプギア「5pb.さん、ああ見えて極度の人見知りだそうです」
ガルデモ「……………」

ネプギアの発言に沈黙する。

岩沢「は？人見知りか？」

ネプギア「ハイ…、初めて会ったときに避けられたことがありまして…」

ネプギアは思い出して暗くなった。

ひさ子「人見知り激しくて何でアイドル？」

ネプギア「スイッチが入っちゃうと紛らわせるそうで、でもプライベートは駄目だそうです」

入江「な、難儀ですね…」

ユイ「アホですね」

ゲーム業界

5pb・クシユン！今誰かが僕の噂をした様な…」

と鼻をすするのだった。

岩沢「音楽なう」(後書き)

世の中そんな人もいる。

面白武器商人「安いよ」(前書き)

「俺の商品はいいぜ」

面白武器商人「安いよ」

武器商人「ようようそこのお譲さんとお兄さん達」
ネプギア「へ？私達ですか？」

商人に呼びとめられるネプテューヌら女神組と銀時ら万事屋組。

武器商人「あつしは宇宙を旅する商人でさア。異世界からかき集めた武器を買ってみてはいかがかな？見てるだけでもいいがな」
神楽「変わったもんがいっぱいあるアルな」

神楽が商品を見ている。

ちなみに商品は以下の通りだ。

オンボロソード：ただの錆着いた剣。それだけ。

グギユの杖：この馬鹿犬と言わないで！

マスケットガン：おもちゃと舐めてたら痛い目に会いますわ

恐竜の舌：実は2メートルも伸びるかもしれないもの。

星の杖：だからって願いがかなうわけがありません

マジックジェム：これを持って魔法少女に…なれるか！

魔王少女の服：魔王じゃないもん！つと声が聞こえた気がする。

大泥棒の銃：あの男の所持していた銃です。

ビームブレード：シュン、って言ったら光線剣が出ます

亀王の甲羅：ふんだらいやよ

裏ムエタイのハチマキ：ヤア！アパチャイだよ！

ビッチガン：ビッチな女の下心…。

兄の赤帽子：かぶると勇気100倍に！

弟の緑帽子：かぶると目立ちにくくなるそうです

墮天使の刀：とある墮天使が持つとされる長刀。

ネプテューヌ「すごそう…でも見てるだけでいいや」
武器商人「あっそ」

そして一通り見た後帰りました。

面白武器商人「安いよ」（後書き）

元ネタ

グギユの杖（ゼロ魔）：ツンデレ魔法使いさんのです。

マスケットガン（まどマギ）：あのやられキャラの愛用銃です。

恐竜の舌（ヨッシー）：やっぱりこいつでしょ

星の杖（マリオストーリー）：レプリカです。ありがとうございます
しました

マジックジェム（まどマギ）：魔法少女の魂が宿っています。

魔王少女の服（リリカルなのは）：分かる人には分かるあの服

大泥棒の銃（ルパン）：伝説の大泥棒ですよ

ビームブレード（スターウォーズ）：良くある武器です。

亀王の甲羅（マリオ）：宿命のライバルさんです

裏ムエタイのハチマキ（ケンイチ）：危ない男のハチマキです

ビッチガン（パンスト）：パンツが銃に…

兄の赤帽子（マリオ）：お馴染みのあの帽子

弟の緑帽子（マリオ）：「兄さんだけずるいや」

堕天使の刀（FF7）：セフィロスの愛剣

ラム「えへへ」「ロム」・・・」(前書き)

「みんなもたっち」

「たっち...」

ラム「えへへ」「ロム」・・・」

六課にロムとラムの保護者ミナが来ている。

ミナ「ご無沙汰していますみなさん」

ネプギア「ミナさん、どうしてここに？」

ミナ「すみません、保護者としてあの子たちが心配で・・・」

はやて「大丈夫やて、あの子ら元気にやってるよ」

ミナ「いえそうではなくて・・・」

皆はちらつと2人を見る。

ブラン「テメエら・・・！人の顔に落書きしてんじゃねえエエ！！！！」

銀時「あああああ！！俺のジャンプが全身真っ黒にいい！！」

新八「ぎゃあああ！！お通ちゃんが全身真っ黒クロスケに！！」

ジャンヌ「コスプレ衣装が！」

ギルシア「目の前が真っ暗だ！！」

ラム「わっい、みんな面白〜い」

ロム「・・・面白い・・・」

早速被害にあっている面々といたずらした2人。

ミナ「ああいうありさまで・・・」

はやて「ああ、そう言うこと・・・」

はやては冷や汗をかいた。

なのは「2人とも、悪戯してないで勉強したら？」

するとなのはが2人にいった。

ラム「やだ。面白くないし」

ロム「やだ…」

2人は否定。

ガシツ

するとなのはが2人の頭を掴んで

なのは「O H A N A S H Iしようか」

と黒い笑顔を出して2人を引きずっていった。

ラム「にぎやああああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

ロム「…うわああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

その後2人の悲鳴が響き渡った。

ミナ「す、すすすみません。か、彼女なんですか?」

顔真っ青のミナがいう。

ネプギア「ヴィヴィオの保護者さんです…。でも怒らせると魔王で
も怖いです…」

ネプギアも真っ青で答える。

後日、2人は絶対になのはに逆らわないことを誓ったそうだ。
トラウマを魂深く刻まれて。

ラム「えへへ」ロム「・・・」(後書き)

親強しです。

キラーマシン」・・・」(前書き)

「ワタシハメイレイニシタガウダケ・・・」

キラーマシン「……」

ネプギア「きゃあ！」

ネプテューヌ「ネプギア！」

ネプギアが何者かに吹っ飛ばされた。

そいつは空中に浮き、灰色の体に赤いライン線のある機械兵器・キラーマシンである。

ラム「おかしいわよ！なんでルウィーで封印されたやるがこんなところに現れるわけ！！？」

ラムの言うには昔犯罪神マジエコンヌが作ったとされる大量殺戮兵器キラーマシン。数は数百以上はあると言われている。現在ルウィーのゲームキャラが封印してあるはそのうちの一体がここにいるのだ。

銀時「どつちにしろ倒さなきゃ意味ねーだろ！！！」

なのは「銀さん！私達も援護するよ！」

銀時が駆け出してなのは達も援護する。

キラーマシンは目を光らせ、右手の斧を振り下ろそうとして神楽がキックではじかれる。

神楽「ミッドチルダの女王神楽様が相手ネ！！！」

キラーマシンは負けじとモーニングスターで攻撃する。

なのは「今だ！ダイバインバズーカ！！」

なのはは隙をついてモーニングスターを破壊した。

ネプテューヌ「トドメは…」

ネプギア「私達です！」

銀時「いくぜ！」

ネプ姉妹と銀時が駆け出す。

銀時・ネプ姉妹「でやああああああ！！！！」

3人はキラーマシンを真つ二つに切った。

キラーマシンは機能を停止した。

ノワール「倒せたわね」

ベール「でもどうしてこんなものが…」

神楽「きつとはぐれもんアル」

新八「神楽ちゃん、野生動物じゃないから」

神楽の言い分に新八が突っ込む。

神楽「何言ってるアル。機械も野生になるね。だからお前は駄眼鏡

アルよ」

新八「んだとおおおお！！」

新八が切れた。

銀時「いや神楽の言葉も一理ある。なんせキラーマシンだからな」

そう言って想像したのはドラクエの奴らだった。

新八「なんでだよオオお!!」

新八のツツコミがこえました。

キラーマシン」「・・・」(後書き)

機械って野生になるんですね。

シナ「良い景気じゃ」「(前書き)

「たのしーな」

シナ「良い景気じゃ」

シナ「よ！ただいまなのじゃ」

動物達「お帰り園長！」

シナが巨大な袋を持って帰ってきた。

ネプギア「園長…また変なもの拾ってきましたね？」

シナ「変なものとは失敬だな？」

シナは出かける際面白いものを拾ってくるのが多い。

ネプギア「で？今回何拾ったって言うんですか？」

シナ「こいつじゃ」

????「きゃ！」

シナが袋を開けると人が出てきた。

いやその人は体がでかい。

しかも下半身がインクの鱗を持つ魚だ。

????「な、なんですかここは!？」

シナ「ここは王魔時動物園」なに考えてるんですかアアアアア
!?!?!」

シナが言い切る前にネプギアがドロップキックを喰らわす。

シナ「なにをする」

ネプギア「なにをするじゃないですよ!?!?!なに思いつきり誘拐み
たいなことしてるんですか!?!」

転生者「あ？人にものを聞くときは自分からの…！！？？」

転生者はふりかえっていく際突然の登場に涙目になっているしらほしと眼があった。

転生者は心を奪われた。

転生者「うおおおおお！！俺はあなたに惚れました！！付き合ってください！！！」

なのは達のハーレムそっちのけでしらほしに告白。

しらほし「すいません。タイプじゃないんです」

ネプギア（そう言う問題！！？）

しらほしの純粋な答えにネプギアは驚く。

ガーーーーー！！！！

転生者はショックを受け、石が砕けたかのように崩れた。

転生者「はは・・・振られた…我が人生始めて振られた…」

そしてネガティブになった転生者はとぼとぼどっかへ去った。

ハーレムは諦めて。

シナ「ワハハハハハ！実に面白い！しらほし！面白ことやるうぜー！」
しらほし「はい！（ニコニコ）」

ネプギア（大丈夫かなこの動物園…）

ネプギアは純粋なしらほしを姉と重ねているのだった。

あと他にもハーレム希望者が出たが、しらほしが断ってみんなハーレムを諦めたと言う。

シナ「良い景気じゃ」(後書き)

天然なのか純粹なのか？

桃子」「しぶぶ・・・」(前書き)

「面白いことになるとついちょっとかい出したくなっちゃうのよ……」

桃子「うふふ・・・」

地球・海鳴市・翠屋

ネプテューヌ「うん、このケーキ最高!」

桃子「あら、それは良かったわ」

ネプテューヌがケーキを食べ、桃子は嬉しそうにする。
すると桃子はネプテューヌに聞いた。

桃子「で、ネプテューヌちゃん。最近彼氏で来たって聞いたけど・・・」
ネプテューヌ「え?・・・うん／＼／＼／」

ネプテューヌは彼氏という単語に顔を赤くする。

桃子「その反応…まさかいるのね!誰なの!」
ネプテューヌ「え、えと…その…」

ネプテューヌはたじたじだ。

ネプテューヌ「ぎ、銀さん…だよ／＼／＼」
士郎、恭也「なにっ!」
桃子「あら」

真っ赤な顔でネプテューヌはいい、士郎と恭也は反応し、桃子は小悪魔のような顔をする。

銀時「おいネプテューヌ、こんなところにいたのか?」

知ってか知らずか絶妙なタイミングで銀時が現れた。

恭也「おい」

銀時「え？なに？」

士郎、恭也「こつちへ来い！うちの道場で説教してやる！」

銀時「なんでだアアアアアアアアアア！！！」

銀時はずるずると引きずられていった。

ネプテューヌ「桃子さん、もしかして面白半分でいってない？」

桃子「さあ どうでしょう」

桃子の本質がよく分からないネプテューヌであった。

某赤いスーパースターでも翻弄させそうな彼女であった。

ちなみに恭也と勝負にあった銀時は一応勝ちました。

シスコンは負ける運命。

恭也「シスコンいうなアアアアアアアアアアアア！！！」

桃子「うふふ・・・」(後書き)

シスコンめ。

恭也「違つわ・・・」

リル」ばぶ」(前書き)

「(早く大人になりたい)」

リル「ばぶ〜」

みなしゃんこんにちは、ねーていあままのむすめのリルでしゅ。

レーティア「リル〜？元気にしてた？」

リル「ばぶ〜！」

このひとがねーていあままでしゅ。

となりのごついおとこがギルシアパパでしゅ。

ギルシア「今ごついって言われた気がするが…」

レーティア「気のせいよ。さあリルちゃん？ご飯の時間よ〜」

リル「う〜」

ちなみにわたしにこうぶちゅはねーていあままのみるくでしゅ。

あのおじはうまかった。

そののましゅまるきゅうのやわらかさもぴかいちだったでしゅ。

ネプテューヌ「レーティア〜 ご飯の時間だよ〜」

レーティア「ああ、ごめん、今リルのご飯あげてるから後で」

あらわれたのはみためがきのくせしてめがみづらしてるねぶてゅー
ぬでしゅ。

そのうしろにははくはつぼさばさのあたましたくそおとこがいる
つしゅ。

銀時「んなもん後でいいだろ？」

レーティア「だめよ。リルの機嫌を損ねるのは母親として駄目なの
よ」

ままはわたしのみかたでしゅ。
けどばーま、てめえはだめだ！

銀時「そうかよ。ったくホント嫌な奴だな」

ムカツ

いくらわたしののうりよくでひどいめにあったからってちよつじに
のりすぎでしゅ。

いっばつこらしめるっしゅ！

リル「ばぶっ！」

ドゴスツ！

銀時「あべしっ！？」

ネプテューヌ「銀さん！？」

ふははは！さいこきねししゅでぐーぱんちしたでしゅ。
ざまあみろでしゅ。

もうじこくはよるちかいでしゅ。

レーティア「銀さんったら本当に赤ちゃんに対して冷たいのね」
ギルシア「そうだな。あいつトラウマもんでもあるのか？」

とらづまはありえないでしゅ。
きつとわたしのよなあかちゃんまかされてひどいめにあったとお
もうでしゅね。

レーティア「そんなことよりギルシア」 またやろつよ！
ギルシア「・・・たくしょうがねえな」

こうしてはばとままはしゅうにいちどきしあんしるんことがおおいつ
しゅ。

みているみにもなつてほしいでしゅ。

とはいってもわるいきはしないっしゅ。

リル「ぶ〜）もうねよ・・・」

わたしのいちにちはおわりでしゅ。
おやすみ〜。

リル「ばぶ」(後書き)

ひらがなばかりでごめんなさい。

プリア」」どうも」(前書き)

「またプリアです」

「プリア」どうも」

「シャマル」大変、薬を切らしてしまっただわ」

「プリア」痛み止め買ってあげましたよ」

「シャマル」え？あ、ありがとう」

「スバル」アイスが食べなくなっただ」

「プリア」5段フルーツアイスですけど」

「スバル」え！？ありがとう！」

「レオン」丸太が足りんな」

「プリア」用意しますね（バッグから丸太が出る）」

「レオン」・・・そのバッグは四次元ポケットか？」

「シャル」お腹空いたな」

「プリア」食べ物ありますよ？（バッグから大量の食べ物が出る）」

「シャル」ありがとう！（っていうかあのバッグでよく入ってたわね
…）」

「はやて」ここまで便利な子は初めてや」

「プリア」当たり前です。備えあれば憂いなしが僕のポリシーですか

ら

今まで準備のよいことにはやてとプリアは話し合う。

はやて「でもさすがに一人で働き過ぎはよくないで？」

プリア「・・・分かりました。親衛隊、前へ！」

プリニー「只今参上ッス！」

プリアの号令にプリニー達が現れる。

プリア「僕はしばらく休むからあとよろしく」

プリニーズ「了解ッス！」

プリニー達は敬礼する。

はやて「やっぱりプリア君は便利やなあ……」

いろんな意味で万能なプリアに感心するはやてであった。

プリア」どうも」(後書き)

ある意味すごい奴だ。

ガレーナ「フフフ・・・」(前書き)

「新たな戦術で挑もうか」

その拳の一つ一つの衝撃が星に影響を及ぼしている。

レオン「楽しいぞ！やはりここまでいくとはな！」

ガレーナ「ああ！余も楽しい！ここまで心踊れるのは主がいてこそだ！」

笑みを絶やさず、激しい拳の打ち合いを続ける。

レオン「余興はここまでだ！最後の力で！」

ガレーナ「よかるう！受けて立つ！」

レオンは青い力を、ガレーナは赤い力を最大限にため、

レオン「獅子王神破！！」

ガレーナ「紅蓮神龍拳！！」

お互いの最終奥義をぶつけ合った。

その頃ミッドで、

ドドドドーーーーー！！

新八「ぶはっちっちっち！（飲んでたお茶を拭きだした）な、何事ですか！？」

はやて「この反応…次元震や！グリフィス！」

グリフィス「はい！管理外世界16 34番からの反応が来ました

！」

次元震が現れた事に戸惑う。

だがみんなが慌てる中でリアス、チフユだけは呆れた顔をしていた。

銀時「？お前らどうしたよ？」

リアス「いや、べつに……」

チフユ「その馬鹿地震を起こしたやつらを知ってるんでな」

チフユがいい捨てるのと銀時達は「あ」と顔を合わせていった。

で、一つの星がぶっこわれていて、その星をぶっ壊した張本人達はどうと、

レオン「……やり過ぎた……」

ガレーナ「アテナスにどやされるな……」

その後2人はアテナスにきついお叱り（という名の10億ボルト攻撃）を喰らい、壊れた星は彼女が直しました。

ガレーナ「フフフ・・・」(後書き)

このままいったらスーパーサイヤ人を超えちゃいそう...

サチ」「エ入々・・・」(前書き)

「おほいおほい」

サチコ「エへへ・・・」

機動六課の入り口からある少女が現れた。

サチコ「銀時く、遊びに来たよ」

銀時「ギヤアアアアアアアア！また出やがったアアアアアア！！！！」

銀時はサチコから逃げる。

サチコはそれを追いかける。

これは何時ものこと。

ネプテューヌ「いつも来るね」

ネプギア「私もう慣れました」

そしていつものように食事するネプ姉妹含む全員。

サチコ「あ、そうそう、みんなにも私のお友達が来てるから」

ネプテューヌ「友達？雪ちゃんたちかな？」

ネプテューヌは軽い気持ちで外を見る。

・・・目から赤い血を流した青白い人たちがいる。

レオン「誰だサイレンのゾンビキャラ連れてこいつて言ったのは？」

サチコ「連れてきたのサチコだよ」

老婆？「サチゴちゃんはげんきがね？」

サチコ「元気だよ」

老人？「ぞうがぞうが」

サチコ「エへへ・・・」（後書き）

サイレンとコワイシャシンをだして見た。

動画でみた程度ですが。

リル「アウ」(前書き)

「(こんな能力もある)」

リル「アウッ」

こんにちは、リルでしゅ。

いまわたしはあるちからにちょうせんしてるでしゅ。

リル「うっ」

ぴかーーーーー!!!

光がはれるとそこには特徴的なくせ毛の生えた紫の髪に紫のワンピースを着た少女だ。

ついに成功です！私は人体成長魔法を習得出来ました！
なんでこの姿になったって？それは私の挑戦心があるからだよ。

リル「さて、ママ達にも驚かせてみようかな」

スキップしながら部屋を出ようとする。

銀時「おっい、ガキンチョいるか？…ってだれだ？」

リル「げっ！？腐った白ヘアー！」

銀時「オイコラ、誰の頭が腐ってるって？」

なんてこと・・・この姿の初対面があのかソテンパーだとは。
私個人としてはあのかなかせた恨みが残ってるもん！

リル「あんたのそのぐしゃぐしゃした頭よおじさん」

銀時「テメーに天然パーマの苦しみが分かるかあああ！！！！しかも

俺はおじさんじゃねえ！！お兄さんと呼べエエ！！」

リル「じゃあ何歳？」

銀時「……………さあ？」

しらねえのかよ！！コイツホント馬鹿か！？

つとそうこうしている間に誰か来た。

フェイト「銀時、なにをそんなに怒鳴ってるの？」

コイツ確かフェイトって言ってたっけ？自称クソパーの妻で…

(ピコン！) いいこと閃いちゃった

リル「きゃー！怖い白いおじさんが私をさらった！(棒読み)」

銀時「おiiiiiiiiiiii！！何言ってるやがんだデメエ！！」

あんたを地獄に陥れるために言ってるんだよ。ホラ、妻さんがお怒りだよ。

フェイト「銀時、なに子供相手に怒鳴ってるの？」

銀時「いや違うんだよ。こいつは……………」

リル「私悪くないよ」(嘘泣き)

フェイト「銀時？お話ししようか？」

フェイトさんはあのもじゃパーをドナドナ連れて行く。

ハッハッハ、ザマアミロ。

レーティア「何かしら騒がしいと思ったらそういつごと…」

声が聞こえたので振り返るとママがいた。

私は思わず胸の中にダイブ。

リル「ママ〜ン・・・」

レーティア「くすぐったいわよリル。やっぱり私の娘ね」

嗚呼、この柔らかかさとおい、私は幸せだ。

っていつかすでに気づくなんてさすがママだね。

遠くである男の声が聞こえたけどそんなのキニシナイ。

私はちつと生体変化能力で姿を大人に変えた。

・・・ちよつとママより胸が大きい？

レーティア「あら？その姿にもなれるのね。でも少し嫉妬しちゃいそう・・・」

リル「ふふ、ママの方がきれいですよ」

ママと同じ視線でいるのって少しいいかも。でもやっぱり子供形態でいいや。

リル「やっぱりこっちの方がしっくりくるや」

ま、いつでも大人になれるけどね。そんな時ギルシアパパが出てくる。

ギルシア「レーティア、どうし・・・ぬおっ！？なんだこの激萌美少女は！？カメラは何処だ！？」

パパは私の様な子供が大好きだったな。まあしばらくこのままでいよう。

銀時「あゝ、だるダボンベツ!？」

・・・聞きたくない声が聞こえたから思わずサイコパンチで殴っちまった。

あやまれ?だが断る!

さて、次はどんな遊びをしようかな、ウフフフフ・・・。

リル「アウッ」（後書き）

書いてて何気に恐ろしい…。

ラハール「くそ・・・」(前書き)

「いい加減ムチムチを近づけるな！」

ラハール「くそ……」

俺様はラハール。

どんな悪魔でも一目置く魔王だ。

だが俺様が魔王でもどうも苦手なものがある。

レーティア「ラハール君」

ラハール「うわ！近寄るなムチムチ！」

それはムチムチ女だ。

あんなプルプル揺れる肉の塊なぞ滅せればいいものを…。

レーティア「酷い…私にそんな挨拶するなんて…」

ラハール「ぬぐ……」

少し傷つけたな…。

だが仕方が無かるう。

俺様にとってはトラウマの一つなのだ。（ドラマCD参照）

俺様もいろいろ努力して何とか触る程度になったがやはり苦手意識が出てしまうう。

チフユ「心の傷はそう簡単には治らん。慣れることが大事だからな」

レオン「一理あるな」

ガレーナ「余もじゃ」

タバネ「ラハールちゃん可哀想ですね」

ラハール「……これは俺様をいじめているのか？」

ラハールは眉をひそめる。

この六課やギルドメンバーはほとんど胸が大きいしムチムチだ。
ラハールにとって地獄場でしかない。

リル「ラハールう」

ラハール「うわ！」

後ろから抱きついたやるは確か悪魔女レイティアの娘のリルだ。
しかも大人形態だからムチムチだ。

ラハール「だー！！引つ付くな！！」

リル「いやよ。私もつと抱きつきたい」

リルは能力で絞める力をあげる。

グオオ苦しい。た、体力が持たん…。

しかもムチムチが当たっているからなおさらだ。

レイティア「リル、苦しそうだからはなしなさい」

リル「は〜い」

運よくレイティアがはなしてくれた。

しかしダメージもあってか足取りがふらふら。

それに顔も青い。

もう限界かと倒れかかる。

ポニユ

ラハール「ん？」

目の前に柔らかい感触がした。

顔をあげると、黒髪の女性・グレイ・ステインだ。

グレイ「・・・なにをしているの?」

無表情のようだが若干の怒りが込まれているように見える。

ラハール「こ…ここまでか・・・ガクッ」

ラハールは気絶した。

グレイ「なんだよ…」

リル「ラハールは胸のおつきい人が苦手みたいなんだよ」
グレイ「・・・」

グレイは少し複雑な気持ちになった。

ラハール「くそ・・・」(後書き)

ある程度は克服。しかし苦手意識が出ることは変わりません。

レーティア「守るわ」(前書き)

「私の娘には指一本触れさせない!」

レーティア「守るわ」

リル「ス〜」

レーティア「ウフフ、可愛いわぁ」

リルをだいてミッドチルダを散歩している。

レーティア「ん〜、リルちゃんのお肌すべすべね〜、マシユマロみたいにかわいいかも。チュ」

リルに対してもイチャイチャするレーティア。

対するリルはいやがる様子はない。というかねているだけです。

???「よう姉ちゃん？可愛いねえ、俺らと遊ばないかい？」

とガラスの悪い見た目が不良ですと思わせる男達が囲んでいました。数は6人。

不良「お姉ちゃん子持ちか！？しかも人妻？やべ！俺興奮してきた」
不良「しかもなんてグラビアアイドル級の体付きなんだ」

不良「ヘッヘッへ、姉ちゃん、大人しく俺らを慕った方が身のためだぜ？」

レーティアを見て興奮する不良とナイフで脅す不良。

本来なら一秒とかわからず片付けられるが、リルがいるのでは手出しができない。

レーティア「・・・分かった、煮るなり焼くなり好きにしなさい」
不良「っうおし！！それじゃあこっちこいよ」

レーティアは不良に案内された。

レーティア「や、あん、そんなにがつつかないで」

案内され早々不良どもにからつをいじられている（特に胸あたり）。
リルは一人の不良が持っている。

不良「あゝ、柔らかえ。こんな弾力性のあるおっぱいは初めてだあ
…」

不良「やっべ俺興奮してきた。アナログスティックもたっちまった
し」

不良「おま、それ古ーよ」

不良「なににせよ。犯しつくしてやろうかね」

リルが人質として取られているのでは手が出せない。
なら一人ひとり搾り取って置くべきかと策を練るレーティア。

リル「うあ？」

リルが目を覚ます。

視界には気持ち悪い不良。

リル「あ…あ…あ…」

不良「あ？…つてちよつと待てここで泣くなよ？絶対泣く…」

リル「ビエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエ！…！（超音波）」

不良達「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

で…

ギルシア「なにになに？『強姦不良グループ逮捕　そして半ミイラ化のなぞ？』」

ギルシアが新聞を呼んで疑問に思う。

レーティア「怖いわねえ…、でも逮捕されて良かったわ」

ネプテューヌ「でもさあ、こいつらまるでサキュバスにでも襲われたかのようにげっそりしてるよ？なにがあっただらう？」

レーティア「なにが起こったか分からないわね。そうよねリルちゃん」

リル「あ〜う〜」

と何事もなかったかのように平穏なまままでいく親娘おやめであった。

レーティア「守るわ」(後書き)

一応リルはレーティアの血が混じってるからね。

アンヘル「ひまだ・・・」(前書き)

「遊び相手はおらぬか？」

アンヘル「ひまだ・・・」

アンヘル「・・・」

カイクの相棒で赤いドラゴン・アンヘルはそわそわしている。
簡単にいえば暇なのだ。

アンヘル（こつ暇では落ち着かん。適当な奴らに罵らせてやるか）

早速ネプ姉妹が来る。

ネプテューヌ「あ。アンちゃんおっはよ」

アンヘル「煩いぞ紫、それから次にそんな名で呼んだら首から上が
がっばりなくなること覚悟しておけ」

ネプテューヌ「うわ、なんつう威圧のある脅し文句」

いらつと着たアンヘルが毒舌を言うとネプテューヌは冷や汗を流す。

ネプギア「悪気はない……………と思いますけど」

アンヘル「ふん、この薄紫のように大人しくすれば良いものを」
ネプテューヌ「む、失礼だよ！」

ちなみに紫はネプテューヌ、薄紫はネプギアとなっている（髪の毛
の色で）。

アンヘル「時に黒とチビ黒はどうしてる？」

ネプギア「ノワールさんとユニちゃんなら2人で競争してるんです。
ってどうかそのユニちゃんのあだ名変えられませんか？」

アンヘル「断る」

アンヘルは真っ先に拒否。

黒はノワール、チビ黒はユニとなっている。

アンヘル「まあよい、む？カイクメ、また女子どもに囲まれておるわ」

ネプギア「分かるんですか？」

ネプテューヌ「そりゃあがいあいだ相棒しているから心は一心同体なんだよ！」

アンヘル「・・・間違っではおらん」

契約によってパートナーとの状況が読めるのだ。

ネプギア「あ、いけない！今日なのはさんが模擬戦する日でした」

ネプテューヌ「あ、そうだね。じゃあアンヘル、またね」

アンヘル「さっさと行け馬鹿もの」

アンヘルはやはりというべきが毒舌。

その表情は豊かに見える。

アンヘル「話し相手が出来たから落ち着いたわ」

ちよっぴり嬉しいアンヘルであった。

アンヘル「ひまだ・・・」(後書き)

真王「ドラゴンは偉そうので偉そうな種族です」

ラム」「むかつく」「ロム」「・・・」(前書き)

「いやなこと思い出しちゃっわ」

「・・・ブルブル」

ラム「むかつく」「ロム」・・・」

ギルシア「ヴィヴィオたん！これでもかというくらいだいてもいいか！？」

ヴィヴィオ「あ、えっと・・・」

なのは、フェイト、ビビ、ネプテューヌ

「断固阻止！」

ギルシア「チッ」

やはりいつもどおりな風景。

ギルシアがヴィヴィオに手をわきわきさせて、なのは達に威圧で止められた。

ラム「むぐ、あいつ見てるとあの変態を思い出すわ・・・」

ロム「嫌い・・・」

双子はとあるあいつを思い出して言う。

フェイト「変態って？」

ラム「変態は変態だよ！あいつからでつかい癖してあたし達に様なちっちゃい子供が好きなんだよ！それに、あ、あいつから体舐められた恨みがあったし・・・」

ロム「・・・ブルブル」

ラムとロムは思い出しただけで寒気を感じた。

フェイト「な、なめ！？・・・なんて破廉恥な！？」

ラム「破廉恥デ済むとおもっ!？おかげで心に汚い思い出が出来ちゃったよ!」

ロム「…もういや…」

はやて「ほほっうっそれは興味深い話やなあ…」

はやては身を乗り出した。

すると保護者のミナがやってくる。

ミナ「二人とも、おふろの時間ですよ」

ラム「わっいおっ風呂っ!」

ロム「ラムちゃん、あらいつこしょ…」

ミナ「フフ、そうですね。では全身に舐めまわすように洗い合いましょっ」

ミナとラムとロムはシャワー室へ去っていった。

………ん?

フエイト「あれ?ミナ…さん?あれ例えだよね?」

はやて「なんや?ミナさんってそんな趣味が?」

フエイトとはやてはそう考えるのであった。

ラム「むかつく」「ロム」・・・」(後書き)

ミナ「って実は百合観察者だったり？」

ミナ「違います」 実際凶星

プリニート「プリニーツス」(前書き)

「プリア様について行くッス！」

プリニー「プリニーツス」

プリア「せいれ〜っ！」

プリアが号令をかけるとプリニー達が集まって十行十列に並ぶ。

プリア「敬礼！直れ！礼！」

プリアの指示にプリニー達は従い、みんな一緒にそろって動く。

なのは「プリアくん、何やってるの？」

プリア「プリニー達の朝の号令です」

近くから聞いてたなのはが言うとプリアは言う。

プリア「僕は一人前のプリニーにさせるため、この1000匹のプリニー達を教育してるんです。それもヴァルバトーゼ様のおかげですけどね」

なのは「ヴァルバトーゼ？確かプリニー教育係の……」

プリア「僕はもともとあそこにプリニーでしたから……」

プリアが言う。

プリア「僕はこうやってプリニー教育係を務めています、ヴィヴィオの護衛をこなすつもりですから」

なのは「嬉しいな〜。プリアくんからそんなことが聞けるなんて……」
ヴィヴィオ「ホントだね〜」

プリア「うわあっ!!!?ヴィヴィオいつの間に!?!?」

プリアはびっくりして後ずさる。

ヴィヴィオ「ついさっき、えへへ、ヴィヴィオちょっと嬉しいかも
…／／／／／」

プリア「え、あ、うん、そうだね…／／／／／」

ヴィヴィオとプリアはもじもじと顔を赤くする。

なのはこれを見て脈ありだねこれは…と思った。
ふとプリアは横を見るとニヤニヤと笑うプリニー達。

プリア「ちょ！笑わないでよ！お金あげないから！」

プリニー「うええ！！？そんな理不尽ッス！！」

どっちが理不尽だとツツコミたいプリアだがむきになるのは情けな
いと思った。

プリア「ごめん、それじゃはい」

プリアはプリニー達に給料を払う。

プリニー達は喜んでもらう。

なのは「プリアくん、将来ヴィヴィオを守る騎士になるかな？」

ヴィヴィオ「そうだと…嬉しいな…／／／／／」

ヴィヴィオはプリアの後姿を見てそう思った。

プリニート「プリニーツス」(後書き)

プリヴィヴィフラグ作ってみた。

Vividでどんな活躍が…あるのか？

レオン「修行だ」(前書き)

「鍛錬は決して怠るな。・・・と師匠からの教訓だ」

レオン「修行だ」

機動六課訓練場

ガレーナ「いくぞレオン」

レオン「いつでもいい」

そこにはガレーナと目隠しをしたレオン。

すると巨大な丸太が彼女を襲うが、レオンはその場を動かず避ける避ける。

まるで丸太が来る位置を把握してるかのように。

ガレーナも同じことやって2人とも合格している。

レオン「ふう・・・」

額の汗を取るレオン。

そこに銀時、ネプギア、新八、神楽、ネプテューヌが現れる。

銀時「イヤあく、精が出てるねえ」

レオン「フン、これくらいではまだ序の口程度だ」

銀時はニヤニヤ笑うが、レオンは切り捨てるように言う。

レオン「だがこれでまた師匠に一步近づいたのも事実」

ネプギア「師匠？」

ガレーナ「ああ、余とレオンの師だ」

レオンとガレーナに師匠というものがいるとは想像しなかった。

レオン「この強さを持つのも全て我が師匠のおかげだ。今やった気配回避のみならず、100キロ疾走、火山渡り、一七山越え、重りをつけて壁キック、更には命綱なしの度胸試しもやったな」

ガレーナ「ああ、思い出せばいい思い出だの」

新八「何処がいい思い出！？傍から聞いてもただの拷問にしか見えねえよ！！」

銀時「つーかお前らの師匠どんだけ過激！？」

拷問にしか見えない修行に新八と銀時は突っ込む。

レオン「なにを言っておる、上空一万キロの綱渡りでも普通だぞ」

全員（レオン、ガレーナ除く）「あれで普通！？」

こちらと師匠の頭は異常だと思つた銀時達。

レオン「師匠は百戦錬磨の真の最強を誇っていたからな。だから私は闘うのさ」

フツ、とほほ笑むレオン。

ネプテユーン「ところで、師匠つてどんな人なのかな？」

レオン「ん？ビルを柔道技で倒せる奴だと思え」

全員「それどんな怪物モンスター！！？？」

やはり異常だと突っ込まざるおえなかった。

「……ツクス！」

「どうしたの？」

「いや、何処ぞのバカ者が妾のことをバカにしているとみた」

「あはは……」

とある森の中で女性2人がこんな会話をしていた。

レオン「修行だ」(後書き)

レオン達のあの強さは師匠がいないと…。

ネプテューヌ「新技発動！」（前書き）

「…って何これ？」

ネプテューヌ「新技発動！」

ネプテューヌ「ネプギアネプギアネプギアーーーー！！！」

ネプテューヌがだだだど部屋に入ってきた。
当然ネプギアも驚く。

ネプギア「ド、どうしたのお姉ちゃん!？」

ネプテューヌ「フフ〜ん、実はね。私達が協力技を披露しようと思
ってね」

ネプギア「協力技？」

ネプテューヌ「早速みんなを呼んで！」

訓練場

銀時「で?何でこんなことになったんだ?」

なのは「まアまあ新技をつきあうぐらいいいんじゃないの銀さん」

銀時達が集まっている。

ネプテューヌ「でね、アーでこうすれば…」

ネプギア「い、いいのかなあ……」

ネプ姉妹はひそひそと新技案を話し合っている。
そして準備が整った。

ネプテューヌ「いくよネプギア！」

ネプギア「う、うん！」

ネプ姉妹が右手をあげる。

ネプ姉妹「我答える、古より蘇りし伝説の剣よ！今ここに姿を現せ！」

何か呪文を唱えるとネプ姉妹の前に魔方陣が現れて光が漏れだす。

銀時「こ、これは……」

桂「何と!?!」

はやて「ホンマにできよつたんかいな！」

プリア「まじっすか!?!」

見ている人たちは驚きと関心の声を出す。

そして現れたのは世にも珍しい伝説の剣……
というよりも白髪グラサンのいかつい顔をした男のような奴だった。

全員「……エエエ……!?!」

近藤「え、え、え……!?!?松平のとつつあん!?!?」

全員揃って啞然とした。

ネプ姉妹でも呆れる始末。

ネプテューヌ（ええ……!?!?なんで!?!?何で剣じゃなくて人おお!?!?）

ネプギア（いや、これ人の姿をした剣だよ……多分）

何が何だか分からないのであたふたし出す姉妹。

ネプ姉妹（ああ、もうどうにでも慣れエエエエエエ！！！）

ネプ姉妹はやけくそで松平剣を振った。

その途中「ブルルルルラアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」と声が聞こえたのは気のせいだと思い込んだ。

ドガー—————！！

振った先のビルが大爆発を引き起こし、木端微塵に吹き飛んだ。

ネプ姉妹「え~~~~~？」

やっぱり姉妹は啞然とするしかなかった。

ネプテューヌとネプギアの協力技、『スーパークリエイトソード』を習得した。

ネプテューヌ「新技発動！」（後書き）

原作のネプテューヌMK2でおっさんの剣で振り回すシーンがあった。

「（じじい）かな」

「（前書き）」

リル「うう〜」

リル「う〜ん…」

おはよう…っと言えはいいのかしらね。

私はリル、レーティアママの娘よ。

今大人化してるけど。

リル「う、うう〜ん！まだ少し眠いフア〜」

まだ寝足りない感じである。

レーティア「ふあ〜、リル、おはよ〜」

リル「おはよう……レーティア母さん」

大人化の状態ではママではなく母さんと呼んでます。

見た目は立派なレディなので子供じみた呼び方は駄目ってま…母さんが言ってたしね。

リル「着替えようか、母さん」

レーティア「そうね。早くきないと風邪ひいちゃうもんね〜」

…一応言っておくけど私も母さんも裸なんだよね。

裸じゃないと寝ている感じがしないの。（リアスさんもそんな感じだったかな？）

レーティア「みんなおはよ〜」

リル「おはようございます」

なのは「あ、2人ともおはよう」

新八「おはようございます」

イツセー「よおー!」

レシア「おはようございます」

みんな食堂で朝の挨拶。

だが、

銀時「おう、またお前か」

リル「何? いちや悪いのか? このクソパーマ」

銀時とリルが同時に見るや否や相変わらずこのやりとり。

なのは達は苦笑いを出す、レーティアはニコニコ笑っている。

銀時「大体テメーのおかげで俺酷い目にあいまくりじゃねえか。どうしてくれんだこのヤロー」

リル「それはあんたの自業自得でしょうが。いつまでも引きずってんじゃないよ馬鹿パーマ」

レーティア「はいはい、2人とも止めなさい」

これ以上やると(銀時が)大惨事になりかねないと思ったのかレーティアが止める。

リル「む〜、分かったよ母さん」

銀時「へっ、いい気味「バゴオツ!」「ダバラッ!?!」?」

リルはしぶしぶ引き下がるが、銀時はほくそ笑いかけてレーティア

とリルのダブルパンチで沈められた。

レーティア「次私の娘にバカにしたら死ぬことより怖いことを受けるのを覚悟しなさい？」

超黒い笑みで銀時に言うレーティア。

周りの黒いオーラは完全に殺意だ。

なのは達は隅っこでガクガク震えている。

レーティア「さ、一緒にご飯を食べましょ？リル」

リル「うん！」

と子供形態に戻ったリルは可愛さ100%の笑顔でいう。

ビビ「やっぱリルちゃんかわええな〜（*^ ^*）」

リル「そうかな？」

ビビ「ええ、そのクソパーマはそこでのたれ死ねばいいのに……」

リル「ホント嫌だね」

ビビと意気投合な意見でいう。

今日も一日平和です。（笑）

銀時「俺は全然平和じゃネエエエエエえ！！」

リル」うう」(後書き)

ビビリルの仲もよしかな？

アクターレ「俺様はアクターレ！」（前書き）

「伝説のダークヒーローだ！」

アクターレ「俺様はアクターレ！」

機動六課の前

そこに金髪で稲妻のような紫の眉毛をした白いマントの男がいる。

「???」我々は、幾多の敵を倒して伝説の武人、白夜叉を探しに、
辺境ミッドチルダにやってきた。しかし！たどり着いたのはいい
が！ここは血も涙もない白い魔王が占拠されていたのだ！」

怪しい実況を無理やり入れているように見える。
するとひらりとよけたかのように動いた。

「???」危ない！見えない光線だ！やはり白い魔王の攻撃はまさに
…」
ネプテューヌ「違うだろオオオオオオ！！！」

ドガッ！

「???」ゴフッ！」

実況中にネプテューヌが横やりを入れた。

ネプテューヌ「アクターレ！何かと実況付けて嘘いわないでよ！」
アクターレ「でも、魔界中で噂になってるんだぞ。大きな閃光で脅
したり白夜叉つてやつをぼこぼこにしたりつてさ」
ネプテューヌ「あながち間違つてないけど…」

男・アクターレはあんまり臆せず答える。

っていうか怖いもの知らずかと。

ネプテューヌ「っていうかさー、アクターレくん確かヴァルっちの魔界で大統領やってるんでしょ？いいの？」

アクターレ「あ、その辺は大統領権限使ったから」

アクターレの答えにネプテューヌは頭を抱えた。

ヴァルバトーゼの魔界に魔界大統領と呼ばれるものがあり、魔界の統治者である。

アクターレ「ふっふっふ、やはりヒーローは忘れたところにやってくるものだな」

ネプテューヌ「あゝ、昔ダークヒーローやってたって言ってたもんね」

アクターレ「フッフ、その通り！まだ俺様のダークヒーロー魂が燃え尽きてはいなかった！来る日もその魂を磨き続け！熱狂のファン達も俺様に支持してくれる！」

若干子供の夢である。

アクターレ「フッフ、今や俺様はライブ一本でこのミッドチルダの住民を俺様色の染まる日は近い」

自画自賛だよと突っ込まないネプテューヌ。

アクターレ「そしてゆくゆくは、あの白い魔王をも超える日も近い！俺様はこのミッドの覇者になれるのだ！」

背景に炎が出るアクターレ。

ネプテューヌ「そう言う人に限って死亡フラグが出るんだよ。ほら」

ネプテューヌは後ろを指差す。

アクターレは振り返ると、

白い魔王なのはがいました。

それもとす黒い頬笑みで。

アクターレ「え？うそ？・・・ギニャアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

その後、アクターレの姿を見たのは誰もいなかった。(生きてます)

アクターレ「俺様はアクターレ！」（後書き）

やはりアクターレはアホですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198w/>

リリカル銀魂 StrikerS ~銀女神鎮魂歌~ショートストーリー

2011年10月19日07時04分発行